因陀羅の生涯・再考

九州大学・人文科学府・人文基礎専攻・芸術学講座
博士課程　李宜蓁

中国・元時代の画僧である因陀羅は国宝と指定された「禅機図断簡」の作者として有名であるが、彼の生涯に対する研究はまだ不十分である。特に、因陀羅の出自、素養、名前、および彼と「禅機図断簡」の着賛者・楚石梵琦が主に活躍していた江南禅林との関係については未だ曖昧な部分が多い。

因陀羅の出自に関しては、室町時代に成書した『禅林小歌注』をはじめとする日本の文献に因陀羅がインド出身であるという記載があるものの、その真偽は確定できない。日本の文献のほかに、サンリツ服部美術館所蔵の「拾得図」には「王舎城中壬因陀羅筆」という落款があるため、因陀羅はインドの北東部に位置する王舎城出身であることが推定される。しかし、書風をみると、この落款には「禅機図断簡」のうちの「寒山拾得図」（東京国立博物館蔵）にある因陀羅の落款との違いがみられることから、出身地の根拠とするには不十分である。

島田修二郎氏は因陀羅の落款と印章の検討を通して、インド僧といわれる因陀羅は「壬」を花押、「梵因」を法名、「陀羅」を梵名とするという見解を示したが、氏の研究には「壬」という字と因陀羅の名前との関係に対する解釈がない。「釋氏陀羅禪余幻墨」と判読された印章を有している因陀羅は禅僧に違いなく、中国の禅僧と同様に道号と法名を持っていると推測できる。つまり、「陀羅」は梵名ではなく、道号である可能性が極めて高い。一方、中国では、俗姓を別号の上に冠して僧侶を呼ぶ習慣があることから、「壬」は因陀羅の俗姓であると推定できる。

一方、「寒山拾得図」の印章と落款からみると、因陀羅は江南の禅文化に馴染んでいたことが明らかである。「寒山拾得図」には「人言洞裏桃花嫩、未必人間有此枝」、「児童不識天邊雪、把作楊華一例看」という二つの印章が捺されており、それぞれ南宋の禅僧である應菴曇華と虚堂智愚の語録からの引用である。また、「寒山拾得図」の落款は江南禅林を含む当時の書壇を支配した趙孟頫の書風と異なり、かなり個性的な書であるといえる。こうした時流に背を向けた書風は、制度にとらわれない禅僧の精神面を表そうとする意図があるとみてよいだろう。

因陀羅は江南の禅文化に詳しく、長らく江南禅林に滞在していたことが推測される。因陀

羅による作品に着賛した人には梵琦だけではなく、梵琦の師である元叟行端もいる。『君台観左右帳記』の因陀羅条では、「天竺寺」と書いてある。ここでの「天竺寺」は恐らく行端が 1305 年から 1312 年までの間に住した杭州・中天竺寺であろう。また、個人蔵の「観音図」には延祐元年（1314）の因陀羅の落款、および杭州近郊に所在する西天目山に活躍した中峰明本が撰した、杭州城内に位置する明慶寺の住持となった統巌嗣良が書した賛文があることを考え合わせると、因陀羅は 1305 年から 1314 年までの間に杭州の禅林に滞在していたと推定できる。